

明石の史跡（34）明石城地の選定



元和3年（1617）7月28日、上洛中の秀忠は、信州松本の小笠原忠真を、明石城（船上）に移封を決定。しかし2万石の加増を受け、10万石の大名としては、船上の地は手狭であったのか、翌4年（1618）2月に、秀忠は新城建築を命じた（史料綜覧15）。そこで城地の選定の儀が浮上。次の3か所が候補地となる（清流話、以下に出典を明記しない場合は同書による）。

- ①塩屋（古城より20町余り東）
- ②蟹坂（古城より10町余り西）
- ③人丸山（古城より10町余り東北）

上記の各場所は、いずれも山陽道の沿線であり、候補地となった歴史的背景を考えてみたい。

嘉吉元年（1441）8月19日、將軍義教弑逆ののち、播磨に下向した赤松満祐は、塩屋（神戸市垂水区）に関を設け、東方よりの防禦施設としていたが、細川淡路守持親による海上攻撃に、もろくも敗退する（建内記）。塩屋川河口部の200m弱の平地に、山陽電鉄・JRの各塩屋駅、国道2号線、そして海浜。これでは城下町の建設には不向きである。

蟹坂（現和坂）は南北朝以来、南軍の侵攻をよく防いでいるものの、加古川まではほぼ平地であって、大川などのような、天然の要害にはめぐまれず、かりに人工の防衛施設の構築となれば、経済的負担も軽視できない。

人丸山（現明石城本丸跡）は、東は山下町と人丸町の間には谷筋があり、南は大手門から数百メートルで海に達し、西に明石川、北は伊川という立地条件に恵まれ、さらに人丸祠の北西にある鴻ノ池（現剛の池）という淵の存在は、城地の決め手にプラスしたようである。岡山から西には、外様の雄藩がたなり、姫路城の支えとしての明石城は、幕府としては重要な意味を持つのである。



明石城